

僕は、ビール1杯の料金を踏み倒してしまいました。裏切ってごめんなさい。次回はビールたくさん飲むから許して)。ホテルでの食事についても同じく、その場で支払わず、チェックアウト時に、何かレストランで食べたか?と聞かれました。さらにロイガーベール通りの教会の頂上は展望台になっていて、エレベーターに乗るには約500円かかりますが、支払いのチェックは一切ありませんでした。このように、人の良心を信じている、言い換えると結構適当な国です。それでも犯罪はほとんど起きないとのこと。外は寒いけど、人々は温かいとても良い国です。ぜひみなさんも氷の国、アイスランドに一度訪れてみてはいかがでしょうか。

## 秋の糸を吐く青虫

経営学部  
矢田 博士

### 一、はじめに

月団新碾瀾花甕	げつだん ひ かじ ひた に瀾す ひた
飲罷呼兒課楚詞	飲み罷わり 児を呼びて 楚詞を課す
風定小軒無落葉	風 定まりて 小軒に落葉 無く
青虫相對吐秋糸	青虫 相い対して 秋糸を 吐く

北宋・秦觀の「秋日」と題された三首連作の詩の第二首である。茶葉の固まりをひいて粉にしたものを、美しい磁器の湯飲みに入れて湯に浸して飲み、それを飲みおわると、我が子呼んで『楚

辞』を勉強させる——といった、秋の日の日常の一駒を詠じた作である。その後半部分に、木の葉を吹き散らしていた風がやみ、静けさをとりもどした小さな離れのあたりで、「秋の糸を吐く青虫」が描かれている。いったいこの「青虫」は何か。一説に「蝶蛾の幼虫」を指すと言ひ、また一説に「蜘蛛」を指すと言ふ。<sup>(1)</sup>

確かに、「糸を吐く」という行為に着目すれば、例えば唐・蘇拯の「蜘蛛論 [蜘蛛の論え]」という五言古詩の冒頭の四句に、

春蚕吐出糸	春蚕 吐きて糸を出せば
濟世功不絶	世を済けて 功は絶えず
蜘蛛吐出糸	蜘蛛 吐きて糸を出せば
飛虫成聚血	飛虫 聚血と成る

《春の蚕が糸を吐き出せば、その生糸は世のために使われ、その功績は絶えることはない。蜘蛛が糸を吐き出せば、その糸で張った網にたくさんの虫がかかり、蜘蛛の餌食となる。》

とあるように、蚕をはじめとした「蛾の幼虫」の類や「蜘蛛」などが容易に思い浮かぶであろう。しかし筆者は、秦觀の詩に見える「秋の糸を吐く青虫」は「蟬」だと考えている。「蝶蛾の幼虫」や「蜘蛛」ならばともかく、「蟬」は糸など吐かないではないかと思われるかもしれないが、実は「秋糸」という言葉こそ、「蟬」説を有力に支持する論拠ともなりうるのである。以下、その点について確かめてみたい。

### 二、「青虫」と表現される虫

「青虫」といえば、日本ではモンシロチョウの幼虫などの「蝶蛾の幼虫」を一般には指すようであるが、中国の古典文献では、青や緑色の虫であれば、広くそれを「青虫」と称している。実際、唐宋の詩においても、「蝶蛾の幼虫」に限らず、「蝗」や「蜘蛛」など、いろいろな虫が「青虫」と表現されており、「蟬」もまたその中に含まれている。この点については、前稿においてすでに確認した通りである。<sup>(2)</sup>

### 三、「蟬の声」と「秋の糸」

このように中国古典詩歌においては「蟬」もまた「青虫」と表現されうるわけであるが、これだけでは秦観の詩に見える「秋の糸を吐く青虫」を「蟬」と判断するには、論拠としては、まだまだ弱いであろう。なぜなら、「蟬」は「糸を吐く」虫ではないからである。「糸を吐く」という行為を基準に考えるならば、「蟬」説よりは、確かに「蝶蛾の幼虫」説や「蜘蛛」説の方が有力な説ということになる。

しかし、冒頭でも述べたように、実は「秋の糸を吐く」という表現こそが、秦観の詩の「青虫」が「蟬」である可能性を有力に支持する論拠ともなるのである。唐・劉兼の「新蟬」という七言律詩に、以下のように言う。

齊女屏幃失旧容	齊女 屏幃 旧容を失い
侍中冠冕有芳蹤	侍中 冠冕 芳蹤 有り
翅翻晚鬢尋香露	翅は 晩鬢を 翻して 香露を 尋ね
声引秋糸逐遠風	声は秋糸を引きて 遠風を 逐う
旅館聽時髭欲白	旅館 聴く時 髭は白からんと 欲し
戍楼聞処葉多紅	戍楼 聞く 処 葉に 紅 多し
只知送恨添愁事	只だ知る 恨みを 送るに 愁事を 添うるを
誰見凌霄羽蛻功	誰か 見ん 霄を 凌ぎ 羽蛻するの 功を

《齊の女はとばりの中で過ごすうちに、かつての美貌を失い、死後その亡骸は蟬と化したという。また蟬の羽で飾られた侍中の冠からは、先人たちのすぐれた業績が思い起こされる。夕暮れに美女の薄く二つに結った髪のような羽を翻し、清らかな露を求めて飛び、その鳴き声は秋の糸を引きのばすかのように、悲しい秋の思いを風にのせて遠くまで響き渡る。旅館でその声にじっと耳を傾けると、悲しみのあまり髭も白くなるかと思われ、物見櫓でその声を耳にする頃、木々の葉はすっかり紅に色を染める。人はただ、蟬が愁い事を託して、そのやるかたない思いを伝え送ることを知るだけで、世俗の汚れを抜け出すように殻から抜け出し、空高く飛び立つその高潔

さを誰も見ようとしぬい。》

劉兼のこの詩は、「新蟬」と題されている通り、蟬を詠ったものである。「齊女」は蟬の異名。齊王に棄てられた后が憤死し、その亡骸が蟬と化し、庭の木に登って責め立てるように鳴いたため、齊王は自らの行いを悔いたという故事を踏まえる。<sup>(3)</sup>「侍中」は、皇帝の側に仕え顧問の役割を果たす高位の文官。その冠には蟬の羽が飾られていたという。「翅翻晚鬢」は、蟬が夕暮れに飛びこを言うのであろう。薄く二つに結った美女の髪を蟬の薄い羽に喩えた言葉に「蟬鬢」という語があるが、ここでは逆に、蟬の羽を薄く結った美女の髪に喩えているのであろう。「蛻」は、殻から抜け出ること。『史記』の「屈原伝」に、「蟬蛻於濁穢。〔蟬は濁穢より蛻す〕」とあるように、さなぎの殻から抜け出る蟬は、しばしば汚れた世俗から抜け出るといった高潔なイメージで捉えられる。

このように劉兼の「新蟬」詩には、蟬に縁のある語が多く用いられているのであるが、注目すべきは、その第四句目に「声引秋糸 [声は秋糸を引きて]」とあるように、蟬の鳴き声との関連で「秋糸」という言葉が用いられている点である。蟬は糸を吐く虫ではない。よって、ここでの「秋糸」は何らかの比喩的な表現だと思われる。ではこの「秋糸」とは、いったい何を比喩しているのであろうか。この点については、「糸 (sī)」と「思 (sī)」とは同音であることから、「秋の糸」の意と「秋の思い」の意とを掛けた、いわゆる「双関語」と、まずは考えられるであろう。<sup>(4)</sup>あるいはまた、南朝梁・江淹の「燈賦」(『初学記』巻二十五「燈」所収)の以下の句を踏まえているのではないかとも思われる。

秋夜如歳	秋の夜は歳のごとく
秋情若糸	秋の情は糸のごとし
怨此懷抱	此の懷抱を怨み
傷此秋期	此の秋期を傷む

《秋の夜はまるで一年のように長く感じられ、秋の思いはあたかももつれ乱れる糸のよう。この胸に抱いた思いを嘆き、この秋という季節を悲しむ。》

江淹はここで、「怨む」「傷む」という言葉で象徴される複雑に乱れる「秋の情」を「糸」に喩えているのである。おそらくは糸のもつれて解きほぐすことができない状態に喩えているのであろう。そしてその「秋の情」は、劉兼の「新蟬」詩の「只知送恨添愁事」の句にも通じるであろう。あるいは劉兼は、江淹の「秋情若糸」の句を縮めて「秋糸」とし、「もつれる糸のように乱れる秋の思い」という意味を表す言葉として用いたのではないだろうか。いずれにしろ、「秋糸」という言葉は、このように、蟬の鳴き声との関連において使用される言葉でもあるのである。

以上のことを踏まえたならば、秦観の詩に見える「秋の糸を吐く青虫」についても、「もつれた糸のように乱れる秋の思いを、吐き出すかのように鳴いている」という意味において、「蟬」と捉えることが可能となるのではないだろうか。

#### 四、結語

以上の考察により、秦観の「秋日」詩の結句に見える「青虫」について、すでに行われている「蝶蛾の幼虫」説と「蜘蛛」説に加え、「蟬」説もまた十分にその可能性を有するものであることが確認できたであろう。

これら三説の優劣について、秦観本人に直に確かめてみることはできない今となっては、最終的に結論づけることは、もはや不可能である。ただ、「蟬」説に立って本詩を解釈した場合、結句の「青虫相對吐秋糸」からは、「青虫」の「青」と「糸（生糸）」から連想される「白」といった視覚面での色彩的効果が読み取れるだけでなく、「蟬の鳴き声」といった聴覚的な効果をも読み取ることが可能となり、「蝶蛾の幼虫」説や「蜘蛛」説に比べ、イメージの上で広がり認められるであろう。そればかりか、「蟬」説に立って解釈してこそ、はじめて前半二句と後半二句の内容面における連関が、より明確になるものと思われるのである。そこで以下、「蟬」説の立場から本詩をさらに詳しく鑑賞してみよう。

《茶葉の固まりをひいて粉にして、美しい磁器の湯飲みに入れて湯に浸す。それを飲みほすと、我が子呼んで「楚詞」を勉強させる。》——

『楚詞』は『楚辞』のこと。戦国時代・楚の屈原や宋玉などの辞賦作品を集めた詞華集である。その中には、

悲哉秋之爲氣也 悲しいかな、秋の気  
 たるや  
 蕭瑟兮草木搖落而變衰 しやうしつ 蕭瑟として 草木  
ようらく へんすい  
 搖落して衰す

《悲しいではないか、秋の気配は。さっと風が吹き付け、草木の葉はゆらゆらと枯れ落ち、色も衰える。》

で始まる、悲秋文学の源泉的な作品とされる宋玉の「九弁」という作品も収められている。この時、秦観が息子に読ませていたのは、あるいは宋玉の「九弁」であったのではなからうか。また、『楚辞』を勉強するにあたっては、親子が向かい合い、まず父親の秦観みずから一節ずつ読み方の模範を示し、その後続けて息子に読ませる、といった形で進められていたのではなからうか。

《風がやみ、我々のいる小さな離れのあたりでは、葉が木から落ちることもなくなった。》——こうして辺りが静まりかえった時に、一瞬の静寂をうち破るかのように聞こえてきたのが、悲しみをよりいっそう募らせる蟬の声だったのではないだろうか。

《二匹の蟬が向かい合って鳴き、もつれた糸のように乱れる秋の悲しい思いを吐き出している。》——向かい合って「悲しいかな、秋の気たるや」などと、『楚辞』の一節を音読している秦観親子の声に呼応するかのように、二匹の蟬が向かい合って鳴いたのではないだろうか。あたかも悲しみ誘う秋の思いを吐き出すかのように。

#### 【注】

- (1) 諸本はおおむね「蝶蛾の幼虫」説を採る。「蜘蛛」説を採るものに、『宋詩選』（今関天彭・辛島驍著／漢詩大系16、一九六六年、集英社）、『宋人七絶選』（毛谷風著、一九八七、書目文獻出版社）などがある。
- (2) 「中国古典詩歌に見える「青虫」」（『語研ニュース』20号、2008年12月）を参照。
- (3) 牛亨問曰、「蟬名齊女者、何也」。答曰、

「齊王后忿而死、尸變為蟬、登庭樹、嘒啾而鳴、王悔恨。故世名蟬曰齊女也」。

[牛亨 問いて曰はく、「蟬を齊女と名づくるは、何ぞや」と。答えて曰く、「齊王の后忿して死し、尸は變じて蟬と為り、庭樹に登り、嘒啾として鳴くに、王 悔恨す。故に世蟬を名づけて齊女と曰うなり」と。ノ晋・崔豹『古今註』卷下「問答釈義」]

- (4) 「双関語」とは、例えば「藕(ǒu) = ハスネ」という字から同音の「偶(ǒu) = つれあい」という字を、同様に「蓮(lián) = ハチス」という字から同音の「憐(lián) = いつくしむ」という字を連想させる、「掛け詞」に似た修辞技法を言う。拙文「ハスに託した恋心」(『語研ニュース』16号、2006年12月)を参照。  
 なお、「糸」と「思」とが「双関語」として使用されている例に、「離歌」と題する漢代の作者不明の五言古詩がある。

晨行梓道中	晨に梓道の中を行けば
梓葉相切磨	梓葉は相い切磨す
与君別交中	君と交わりを別つ中
繡如新縑羅	繡たること新縑羅の如し
裂之有余糸	之れを裂けば 余糸 有り
吐之無還期	之れを吐くも 還期 無し

《朝に梓の並木道を行くと、梓の葉は親しげにこすれあう。あなたとお別れした今となつては、織りあがったばかりの薄い絹織物がピシッと切り裂けたかのよう。絹織物を裂けば、その裂け目にはたくさんの糸が現れるが、あなたへのあり余る思いを吐き出してみても、あなたは帰らない。》

最終句の「吐之」の「之」は、「余糸(yú sī) = たくさんの糸」を指すが、それがさらに同音の「余思(yú sī) = ありあまる思い」を連想させる働きをしていることは明らかであろう。

[付記]

本稿は、拙論「秋の糸を吐く青虫 秦観「秋日」 「青虫」并」(『橄欖』第十三号、二〇〇五年)をもとに整理したものである。その際に、若干の補足・修正を加えた。

## 英語の辞書について (1) 英和辞典

法学部  
北尾 泰幸

### 1. はじめに

英語の勉強には英和辞典や英英辞典が欠かせないが、学生諸君は英語の辞書をどのような基準で選んでいるだろうか。「高校の先生に薦められた辞書を使っている。」という人もいれば、辞書そのものに注目するのではなく、「電子辞書の使い勝手が良かった。」という基準で辞書を選んでいる人もいるかもしれない。実は辞書選びは非常に重要であり、いい辞書を選ぶことによって、英語力の伸びも大きく変わってくる。私は毎年、年度初めの授業で英語の辞書の話をしているが、その話の一部を、これから数回にわたり紹介していきたいと思う。今回は英和辞典について取り上げる。

### 2. 発信型辞典と収集型・蓄積型辞典

英和辞典にはいわゆる「発信型」の指向を持つものと「収集型・蓄積型」の指向を持つものの二種類があることをご存知だろうか。前者にあたるものは、(1a, b)の辞書であり、後者にあたるものが(2)や、研究社の『新英和大辞典 第6版』のようないわゆる大辞典である。

- (1) a. 井上永幸・赤野一郎 (2007) 『ウィズダム英和辞典 第2版』三省堂  
 b. 小西友七・南出康世 (2006) 『ジーニアス英和辞典 第4版』大修館書店  
 (2) 松田徳一郎 ほか (1999) 『リーダーズ英和辞典 第2版』研究社

「発信型」辞典のさきがけは(1b)の『ジー